名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第37巻　第2号　pp. 247–254

〔論文〕

「ケサランパサラン」はオノマトペ起源か

――方言オノマトペの語構成に基づく検討――

川　﨑　めぐみ

名古屋学院大学商学部

要　旨

「ケサランパサラン」「ケサラバサラ」「テンサラバサラ」などと呼ばれる白い毛を持つ妖怪あるいは存在がいる。これらの名称について，オノマトペを起源とするという説がある。本稿では，方言オノマトペの語構成という観点から，「ケサランパサラン」のオノマトペ起源説の検証を行う。結論としては，オノマトペ標識「ラ」「ン」を含むこと，前方の語基音が変化した後方語基型の形を持つ点ではオノマトペに近い形をしているが，変化した語基音が独立した意味を持つことはほぼないことから，オノマトペ起源である可能性は低いとした。加えて，オノマトペ起源ではない語がオノマトペであると解釈される要件として，既存のオノマトペ語基を含むこと，オノマトペ標識を含んだオノマトペ語型に収まること，オノマトペに特徴的な音を持つことがあることを指摘した。

キーワード：オノマトペ，ケサランパサラン，語構成，変則重なり語形

The Onomatopoeic Origin of “Kesaran Pasaran”: A Word-Formation-Based Study of Dialectal Ideophones

Megumi KAWASAKI

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

発行日　2026年3月31日

1. はじめに

「ケサランパサラン」「ケセランパサラン」あるいは「ケサラバサラ」や「テンサラバサラ」などと呼ばれる妖怪，または「もの」がある。飯倉（2006）によると，1970年代にブームになったと言われ，テレビなどで取り上げられたものである。『日本妖怪大事典』には，次のように記されている。

ケサランパサラン　主に東北地方で見られる不思議な毛玉で，山形県ではテンサラバサラ，宮城県本吉郡，志田郡，黒川郡などではケサラバサラという。ウサギの尻尾のような形をした白い毛玉で，小豆から鶏卵くらいの大きさとするのが一般的である。

神社の境内や深山などに落ちていたり，庭先などにどこからか飛んでくるという。

山形県西田川郡念珠関村小名部（温海町）では，雷と一緒に天から落ちてくるもので，天から授かった宝物だとしている。持っていると幸せが訪れるといわれ，桐の箱に納めて餌として白粉を与えて大切に扱う。

とうてい生き物には見えないが，稀に増えることもある。多くの場合は1年に1度しか見てはならず，禁を犯すと不幸になるという。

近年，都会でもケサランパサランを見たという人があるが，そうした人たちの情報を統合すると，どうやら植物の種子のようなもののことをいっているらしい。

また，ケサランパサランとの関係は明らかではないが，『和漢三才図会』には鮓荅と書いてヘイサラバサラ，ヘイサラバサルと読ませる玉についての記述がある。

獣の肝胆の間に生じる白い玉で，小さいものは栗や榛くらい，大きいものは鶏卵ほどもあり，石や骨に似ているが，それらとは別物である。蒙古人はこの玉を使って雨乞いをし，牛馬のものが最も効験がある。オランダ渡来の平佐羅婆佐留と同じもので，痘疹や解毒剤に用いられるものだ，などと記されている。

『陸前の伝説』三崎一夫／『民間伝承』通巻号「テンサラバサラ」佐藤光民／『和漢三才図会』寺島良安編・島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注

また，『日本方言大事典』にも，「けさらばさら　俗信の一つ。兎の毛のような白い毛の塊で，ふわふわ飛んでくるもの。（山形県東田川郡）」と記述がある。宮城県を中心に，東北地方で伝承として伝えられている存在である。

このケサランパサランについて，その正体も不明であることに加え，名称の語源もまた明らかではないとされているが，語源説の1つにオノマトペ由来であるというものがある。宮城県大崎市の保育園のサイトには，次のように，オノマトペ（擬態語）が「ケサランパサラン」の名称の由来の1つであるとして紹介されている。

ケサランパサラン

ケサランパサランは江戸時代以降の民間伝承上の謎の生物とされる物体で，ケサランパサランの正体はガガイモの種だとする説もあります。外観は，タンポポの綿毛や兎の尻尾のようなフワフワした白い毛玉で，西洋でゴッサマー（gossamer）やエンゼルヘアと呼ばれているものと同類のものと考えられています。

空中をフラフラと飛んでいると言われている事から，一つ一つが小さな妖力を持つ妖怪とも言われ，未確認生物として扱われることもあります。

名前の由来については，スペイン語の「ケセラセラ」が語源だという説，「袈裟羅・婆裟羅」（けさら・ばさら）という梵語が語源だという説，羽毛のようにパサパサしているからという説，「何がなんだかさっぱりわからん」を意味する東北地方の言葉との説，などがあります。

穴の開いた桐の箱の中でおしろいを与えることで飼育でき，増殖したり，持ち主に幸せを呼んだりすると言われています。

（こばと保育園サイト「お知らせ」より／下線は筆者による）

「ケサランパサラン」や「ケサラバサラ」の語源がオノマトペ（擬態語）であるという説は，それほど多く記述されておらず，説として有力であるとは言えない。しかし，オノマトペであると仮定した場合に，方言オノマトペの語構成の観点からどのように解釈ができるのか，またオノマトペ説はどの程度，信頼が置けるのかという点は興味深い。そこで本稿では，「ケサランパサラン」あるいは「ケサラバサラ」といった名称について，方言オノマトペの語構成の観点から分析を行い，これまで明らかになってきているオノマトペの語構成との異同を踏まえ，オノマトペ説の検証を行う。そのうえで，類似の語形でありながらオノマトペとはみなされていない語との違いから，オノマトペという語種として捉えられるにはどのような条件が必要か，オノマトペとしての語感はどのようなものなのかという問いにも迫っていきたいと思う。

2. 変則重なり語形について

これらの名称がオノマトペ由来であると言われるようになった情報源は判然としないが，語の形から自然と類推されたものだろうと考えられる。オノマトペは一般的に，「ゴロゴロ」や「ドタドタ」のような単純な繰り返しの語形であるABAB型が多いが，東北地方のオノマトペによく見られる語型には，ABCB型・ABCD型といった変則的な重なり語形がある。例えば，ABCB型には「ツカポカ」（とげが刺さる感覚）や「テタパタ」（忙しくする様子）など，ABCD型には「ガサゴソ」（落ち着かない様子）や「ガタピコ」（机の脚などが平らにならずに動く様子）といった語がある。

都竹（1965）では，このようなABCB型を「類音重ねことば」と呼んでおり，「中部地方の西部から九州北部までには少ない」としている。また，類音重ねことばには4拍の「ABCB」という語形のみならず，「ヤッサラクッサラ」「バサラクサラ」（どちらも平泉），「グンナガンナ」（五戸）

といった,ABCB型に類する音節が6音節以上のものも「多音節の重ねことば」として含まれる。次の（1）～（3）は都竹（1965）が示す類音重ねことばである。

（1）チラホラ型（類音重ねことば，カナ四字分）
　エロガロ　ろれつが回らないようす。五戸。
　ギロガロ　きょろきょろ。「～とわき見をする」つかみにくく動くようす。「～うなぎは～て」五戸。
　グダガダ　不行儀なようす。五戸。
　ゴロガロ　物がころがるようす。五戸。
　ヤラホラ　上調子にさわぐようす。五戸。
　ダガバガ　手荒く。さっさと。平泉。
　チタクタ　小忙しく立ち回るようす。平泉。
　ドガチャガ　もんちゃく。滋賀県滋賀郡八屋戸。
　ワヤクチャ　乱雑。滋賀県神崎郡。
　ワチャクチャ　思い思いに。「～しゃべる。」伊予大三島。
　ベチャクチャ　べちゃくちゃ。熊本県。
　ヤチャクチャ　乱雑なようす。ごたごた。奥羽。
（2）類音重ね言葉，――ラ型。
　ヤッサラクッサラ　いくども。再三。平泉。
　バサラクサラ　しまりないようす。つるしたむしろなどが，動くようす。平泉。
　ヌーラクゥーラ　汚物がところかまわずあるようす。首里。
（3）類音重ねことば，一般。
　グンナガンナ　曲がりくねるようす。五戸。
　ヤッサモッサ　どんどん。「～はかどる」壱岐。
　ピリンパラン　ぺちゃくちゃ。ぺらぺら。首里。

さらに，島（1960）は岩手県のオノマトペについて触れているが，その中で「複式畳語」という名称を用いて，ABCB型のオノマトペを挙げている。（4）は島（1960）のうち，『聴耳草紙』という民話集に出てくるABCB型オノマトペの一部である。

（4）ガッチラモッチラ，ザンブゴンブ，シックモック，チックラモックラ，ビッタカッタ，ペッチャラクッチャラ，ベッタリクッタリ

このように多様な語が見られるわけであるが，ABCB型のオノマトペの語構成については，川﨑（2025）が次の（5）のように分類している。川﨑（2025）では，筆者の出身地である山形県寒河江市と，盛岡市のオノマトペを扱っている中谷（2010）の語を扱っている。（5）に「盛岡」

とあるのは中谷（2010）に見られる語である。

（5）ア．前方語基型（後部語基語音変化；ABAB型の後部の「A」が変化する）
ABaB：「デコカコ」←「デコデコ」（不揃いなこと。凸凹，寒河江）
「エカホカ」←「エカエカ」（刺々しいこと。盛岡）
イ．後方語基型（前部語基語音変化；ABAB型の前部の「A」が変化する）
aBAB：「テタパタ」←「パタパタ」（子供が素足で走る音・様。盛岡）
寒河江市方言のABCB型に例なし
ウ．前後語基並立型（2語基組み合わせ）
AB＋CB：「デコボコ」（デコ＋ボコ，寒河江）
「モジャクチャ」（モジャ＋クチャ，盛岡）
エ．非独立語基型（語基を反復させたABAB型が存在しない）
ABCB：「アゴチャゴ」「ノラクラ」（寒河江）
「ヒラカラ」（さっさと，速やかに。盛岡）

これに加えて，川﨑（2025）は「ラ」の付いた形について，（6）のようにその語形への派生過程を5種類に分けている。山形県寒河江市方言のオノマトペにおいては，ABAB型から派生したと考えられる①と②がほとんどであり，③〜⑤は数例しか見られない。③④は派生元となったABAB型が想定できない語，⑤は既成の語からの派生とは考えられないものである。よって，オノマトペの語構成の可能性を探る際には，①と②を中心として考えることとなる。

（6）①ABAB→ABCB→ABラCBラ
（「ネツラクツラ」「ピタラカタラ」「モタラカタラ」など）
②ABAB→ABラABラ→ABラCBラ
（「アフラタフラ」「グナラシャナラ」など）
③ABCB→ABラCBラ
④ABラABラ→ABラCBラ
⑤φ→ABラCBラ（「スネラクネラ」）

ここで，オノマトペとして考えたときの「ケサランパサラン」「ケサラバサラ」はABCB型に，「ケセランパサラン」はABCD型に当てはまる。「ケサランパサラン」については，「ン」という要素が付加されてはいるが，とりわけ（2）の「バサラクサラ」と語基音が類似しており，語形として近いものである。なお，「ン」は「バタンバタン」「ゴロンゴロン」などのようにオノマトペによく用いられる要素（オノマトペ標識）である。変則重なり語形のオノマトペにはこのような派生の特徴があるが，これをもとに「ケサランパサラン」などの名称がどのような語構成を持ち，どのように派生してきたのかを考察し，それらの名称がオノマトペ起源である可能性を検討して

いく。

3.「ケサランパサラン」の語構成と起源説の検証

それでは,「ケサランパサラン」という名称がどのように成立するのかを，オノマトペであると仮定して考えていく。まず，オノマトペは語基と呼ばれる意味の中心となる音韻要素と，それに付加される促音，撥音,「リ」,「ラ」などのオノマトペ標識から構成される。また反復形と非反復形に分かれる。ABCB型は変則的な反復形である。

「ケサランパサラン」については,さきに挙げた「羽毛のようにパサパサしているからという説」という記述から,「パサ」が意味の中心となる語基だと考えられる。つまり,川﨑（2025）の「イ.後方語基型」に当たる。

この「パサ」を元に派生過程を考えると，(6) ①のパターンであれば,「パサパサ」の前部語基音が変化することで「ケサパサ」という語が成立し，それに「ラ」と「ン」が付加されることで「ケサランパサラン」となったと考えられる。しかし,「ケサパサ」という語形は存在しないため,このルートは想定できない。一方,(6) ②のパターンであれば,「ラ」という要素が付加されて「パサラパサラ」という語ができ，さらに「ン」が付加されて「パサランパサラン」という語ができた後に，前部語基音が変化して「ケサランパサラン」になったと考えられる。あるいは,「パサラパサラ」から「ケサラパサラ」に変化し，それに「ン」が付加されたというルートも考えられる。東北方言において「ラ」という要素は比較的生産性を持つ要素であるため,「パサラパサラ」という語形も不自然ではない。そのため，(7) のようなAとBの2つの派生過程が想定される。

(7) A:「パサパサ」→「パサラパサラ」→「パサランパサラン」→「ケサランパサラン」
　　B:「パサパサ」→「パサラパサラ」→「ケサラパサラ」→「ケサランパサラン」

ただし,『日本方言大事典』には，山形県の例として「ケサラバサラ」という名称が見える。無声音「パ」と有声音「バ」の違いがあるが,「ン」のない形が存在することから,「ン」の付加が最後であり，(7) Bのほうが妥当性が高いと考えられる。

なお,「ケサラバサラ」については，語基「バサ」を持つABAB型語形である「バサバサ」,ABラABラ型語形「バサラバサラ」が存在する。「バサバサ」は鳥の羽ばたきなどを意味するほか,「バサラバサラ」は『山形県方言辞典』において「服をしどけなく着る様」との解説があり,多義的な語基となっている。白い毛の塊であるとされるものを「バサバサ」と表現するのも,「ケ(毛)」というところから考えれば不自然ではない。

ところで,「ケサランパサラン」の語構成として,「ケ（毛)」が「サラサラ」の「ケ（毛）＋サラ＋ン」と「パサ＋ラ＋ン」であるという想定もできる。しかし，反復形のオノマトペでは,語の前後の部分においてこのような非対称は生じない。(5) ウの語基並立型であっても，語基の数や構成は揃っているものである。よって,「ケ（毛）＋サラ＋ン」という構成は想定できない。

では，前部にある「ケサラン」の「ケサ」が「パサ」という語基から変化したと考えることは可能だろうか。この問題は，変化というよりも，「毛」という一般語がオノマトペの語の中に入り込むということがあり得るのかという側面からまずは考えたい。飯倉（2006）では，山形市立博物館の展示解説に「テンサラバサラ」という名称が見られるという資料が紹介されている。「テンサラバサラ」の「テン」は「天」であり，「天から舞いおりてくる」ために「テン」が付けられたと解釈し得る。このようにオノマトペの中に一般語が入り込む例としては，山形県方言の「デコシコ」（凸凹）がある。「シコ」は「引っ込む」という意味であり，「ヒ」が「シ」になっているものである。このように一般語が入り込む例はなくはない。しかし問題のもう一方の側面として，「パサ」という語基の「パ」が一般語に置き換わり得るのかという疑問がある。「長ひょろい」なども一般語と混じっている語ではあるが，「ヒョロ」という語基が維持されている。

川﨑（2024）では，変化した後の語基の音について傾向があることを指摘している。川﨑（2024）は，ABCB型の後部語基音「C」の部分がカ行音，マ行音，パ行音のものが特徴的に見られることを示している。また，拍数が多いABラABラ型について発音しやすくするための変化であること，オノマトペとして目立たせる効果があることを指摘している。つまり変化後の音はあくまで補助的な役割を持つのみである。「ケサランパサラン」は後方語基型であるが，後方語基型である山形県寒河江市方言の「ツタパタ」（語基「パタ」），「テキパキ」（語基「パキ」）はどちらも「パタパタ」「パキパキ」という語とほぼ同じ意味であり，新たな意味が加わることはない。この視点からいくと，変化後の場合，「ケ」が「毛」，「テン」が「天」となるような，語基の一部が独立した意味を持った一般語となることは想定しにくい。よって，結論としては，「ケサランパサラン」「ケサラバサラ」「テンサラバサラ」といった名称は，オノマトペの語構成や派生の流れから言えば例外的なものであり，オノマトペ起源である可能性は低いと言える。

4. オノマトペ起源と判断される要因

前節にてオノマトペ起源とするのは難しいとしたが，ではなぜ「ケサランパサラン」のオノマトペ起源説が出てきたのだろうか。似たような形としては，「ナンジャモンジャ」という木（ヒトツバタゴなど）や「やっさいもっさい」という木更津市の祭りの囃子詞などがあり，変則的な繰り返しの言葉はオノマトペに限らず存在する。今井（2009）は，オノマトペ以外の「変則反復語」も含め，「たとえ元になった単語に意味があったとしても，それを越えた形で『音』や『リズム』の効果を発揮し得る言葉」であるとしている。とはいえ，「ナンジャモンジャ」や「やっさいもっさい」，今井（2009）が挙げる「ニライカナイ」（異界の名）や「ドーマンセーマン」（呪文）をオノマトペ起源とする考え方はほとんどない。

「ケサランパサラン」がオノマトペらしさを醸し出すのはなぜなのか。その点については，まず川﨑（2024）で取り上げた後部語基音にパ行音が含まれるという点，そして，たまたま「パサ」「バサ」という既存のオノマトペ語基と形が同じとなった点が要因としてあると見る。現代日本語において，和語の語頭にパ行音が来ないことはよく知られている。その例外となるのがオノマトペ

である。川﨑（2024）では，ABCB型の「C」にパ行音が来るものには「ガタピシ」「ツタパタ」「ツカポカ」「テキパキ」「カタラピタラ」「トタラパタラ」という語を挙げている。ABCD型にも「ジャガポコ」という語が存在している。このような語はオノマトペらしいと判断されやすい。さらに，オノマトペ標識と同じ要素「ラ」「ン」が含まれている点も，オノマトペらしさが出ている。オノマトペ標識と同じ要素が含まれず，「やっさいもっさい」「ニライカナイ」のように「イ」などの違う音で終わるものは，オノマトペらしさが低くなる。

また，このような語をオノマトペと判断するのは，語基から意味が取れるかどうかであり，既存のオノマトペから類推できるかどうかが重要である。「ケサランパサラン」は「パサ」，「ケサラバサラ」は「バサ」という部分が含まれていたために，「パサパサ」「バサバサ」という類推が入る余地があった。それに加え，パ行音やオノマトペ標識と同じ音が含まれていたために，オノマトペ起源説が生まれたという解釈が成り立ったと考えられる。つまり，語形におけるオノマトペらしさは，既存のオノマトペの語基や語型との類似性に依っているのである。よって，オノマトペという語種として捉えられるには，意味を持つ既存のオノマトペの語基が含まれること，オノマトペ標識を含んだオノマトペ語型に収まること，オノマトペに特徴的な音を持つことという要件を，どの程度満たすかによると考えられる。

引用・参考文献

飯倉義之（2006）「『名付け』と『知識』の妖怪現象ケサランパサランあるいはテンサラバサラの一九七〇年代」『口承文藝研究』(29)，pp. 124–137.

今井秀和（2009）「怪しの変則反復語ニライカナイ，ケサランパサラン，ドグラマグラ」『世間話研究』19，pp. 22–41.

角岡賢一（2005）「日本語オノマトペの交替形語彙分析」『龍谷大学国際センター研究年報』14，pp. 39–57.

川﨑めぐみ（2024）「山形県方言におけるABCB・ABCD型系統のオノマトペの特徴」大木一夫・甲田直美編『日本語変異論の現在』ひつじ書房，pp. 139–156.

川﨑めぐみ（2025）『方言オノマトペの形態と意味』ひつじ書房.

島稔（1960）「日本語におけるオノマトペアの位置と岩手の方言」民研岩手班調査資料10.

社会福祉法人愛光福祉会こばと保育園「ケサランパサラン」『こばと保育園TOP』〈https://www.aikofukushi.com/kobato/koba_info.php?entry=142〉.

都竹通年雄（1965）「方言の擬声語・擬態語」『言語生活』1965–12.

中谷眞也編著（2010）『盛岡の擬容語（擬態語・擬音語）辞典』自費出版.

徳川宗賢監修（1989）『日本方言大辞典』小学館（ジャパンナレッジ版）.

水木しげる・村上健司（2015）『改訂・携帯版　日本妖怪大事典』（角川文庫／Kindle版）KADOKAWA.

山形県方言研究会編（1970）『山形県方言辞典』山形県方言辞典刊行会.